

月刊

がんばろうニッポンの中小企業

平成25年7月15日発行(毎月1回15日発行) 通巻454号第28巻第2号

Small and Medium Enterprises in Japan, go for it!!

ビジネスサミット

Monthly Business Summit

2013 August 8

林克彦

【巻頭対談】

北海道ガーデン街道代表取締役

【特集】
産地力を磨く



フランスの花飾り職人 セヴリナ・ラルティエグ

セヴリナとの出会い

フランス北部ノルマンディー地方のリジューという町にフランス伝統のコサージュ（花飾り）づくりで打ち込む「花職人」のアトリエがある。そんな情報を耳にし、入手した電話番号に電話を試してみた。留守電話だったのでメッセージを残してみた。

「私は日本人のバイヤーです。素敵な作品を拝見しました。もし、お時間が頂けるのなら是非、お会いしたいです」。

その数時間後、携帯電話にショートメッセージが届きました。「ボンジュール・マダム！ご連絡有り難うございます。4月18日でしたら時間が空いております」正直、驚きました。こんなに早く返信を日時指定で頂けるとは思っていなかったからです。大慌てでチケットをネットで購入し、約束を取り付けた。春先のノルマンディーは、まだ肌寒く、小雨が降っていました。駅のホームに降りると、右手前方にドーム型の教会の屋根がみえる。

リジューという町はフランス

のルルドに続いてカトリック教徒の第2の聖地といわれる巡礼地です。リジュー駅まで車で迎えに来てくれたセヴリナさんに会い、彼女の大切なアトリエに案内してもらいました。

アトリエに入った瞬間に「どうやって、こんなに多くの小道具を入手したのですか？」と思わず質問してしまいました。彼女は「25年間かけて少しずつ集めたものですよ」と、さらりと答える。私はフランスに住んでからというもの、自分の趣味で蚤の市に通い、アンティークの収集を始め、今ではプロのアンティークバイヤーとしての仕事をしている。「25年間」という時間はこんなに多くのモノを集めることができるのか。型の種類によっては2個が一致しないと使えないモノも多く、時間が25年もあったとはいえ、このアトリエにある小道具の種類と量は尋常ではない。彼女の仕事に対する情熱、想いの大きさについて、詳しく話を聞く前であったが「凄い人を見つけてしまった」と思わずにはいられなかった。



年代物の小道具を使い、手作りでコサージュ制作に打ち込むセヴリナさんのアトリエには、創造精神に溢れるフランス伝統の技が息づいている。

クリエーションの エスプリを語る

アトリエは彼女の可愛いらしい一軒家の自宅の庭の中にあり、自宅のサロンで詳しい話を聞くことになった。

「もし、貴方が連絡して来たのが去年だったら、会うことはなかったと思うわ」と、セヴリナさんは切り出した。彼女は10年前から世界的に有名な高級オートクチュールブランドのコサージュ制作を請け負って仕事をしている。それが生活の糧になっていたし、ハードなスケジュー

ルで大変ではあったが、やりがいのある仕事である。

しかし、彼女は私が連絡する3ヶ月前ぐらいから「自分の求めているクリエーション」と高級ブランドのためのクリエーションには、エスプリ（精神）

の違いがあると感じ始めていた。

ビッグブランドは自分達の仕事をしている一職人の名前を公表することは無い。いくら美しい作品をつくったとしても決して「彼女自身の仕事」と一般に認められることはないのだ。少しオートクチュールの仕事を減らそう。そして「セヴリナ・ラルティエグ」としてのクリエーションをもっと世界に広げて行きたい。彼女が薄っすらと思っていた矢先に、私からのメッセージが届いたのだった。

フランス国内で彼女のような昔からの小道具、専用の機具を使って全てを手仕事で制作をしている職人は、いまや彼女一人である。彼女の他に3社ぐらいは制作のアトリエはあるが、ここでは古い工具の木の柄の部分を取り取り、鉄の部分だけを現代の機械にはめ込んで布を切り

抜く作業をして効率よく、より大量に制作できるようにしている。だが、セヴリナさんは貴重な昔の工具の一部が切り取られて使われることに対して酷く胸を痛めている。

年代物の小道具で作る 手仕事へのこだわり

一枚一枚の花びらや葉っぱの染色という微妙なニュアンスを出すのも難しく、この染色のニュアンスに長い時間を費やして仕事をしている職人も、おそらくセヴリナさんぐらいだと思う。彼女が使っている小道具の中で一番古い物は1770年代の物で、一番新しい小道具は1930年代のものである。彼女の工房には、1930年より新しい時代の工具は一つとして存在しない。これら年代物の工具と機具を使いながら、布の裁断から色付け、型抜き、ゴフラージュ（立体感を持たせるための工程）、組み立てまでの全てを一人の手作業で行なっている。

彼女が6歳の時にサヴォア地方の小さな洋品店で小さなスミ

レのコサージュを買ってもらった。それがコサージュ作りのきっかけになって見様見真似でつくり始めた。それから蚤の市に行くたびにコサージュ用の工具を見つけると、ポケットに入っているお小遣いで購入して少しずつ買

い集めてきた。フランス最後の花飾り専門店の社長で60歳の歳の差があるムッシュと心の交流を深め、お花の作り方とかではなく、この職業の職人達がどのような雰囲気の中で仕事をしているのかといった往年のアトリエの話聞いて、よりコサージュ作りの世界に生きるようになった。やがて、彼女がこの職業の魂、エスプリ、歴史をたった一人で受け継ぐことになった。

彼女の手元には、25年の時間は費やしたが、少しずつ貴重な工具が不思議な力によって集結して来て、昔ながらのアトリエをセヴリナと一緒に作り出した。彼女が作り上げる可憐で繊細なコサージュは、大量生産、大量消費でモノの価値、大切さがわからなくなっている現代の世界に「本当に、これでいいの？」と問いかけている。

オペラ座のバレエ公演で バレリーナの髪を飾る

2013年6月22日からパリのオペラ座で行なわれたロマンティックバレエの代表作「ラ・シルフィード」のバレリーナの髪飾りに使われる「花」をセヴリナ・ラルティエグが担当した。セヴリナを含め4社にオ

ファーがあり、オペラ座の厳しい審査の結果、一番値段が高く、でも美しかったセヴリナの「コサージュ」が選ばれた。その話を聞いて「さすが、パリのオペラ座」と感心した。観客が真近かで見れるものではない物にも最高の物を選定するところが「プロ中のプロ」だと感じ、嬉しく思った。

厳しいダンスの特訓を重ねて公演に出演するプリマ達とセヴリナの花達は、本当にお似合いだった。



Profile

佐藤百香 (さとう・ももか)

1996年に渡仏、パリ在住。欧州の衣食住に関するコンサルタントとして日仏間を往来し、活躍中。